

## 女性学インスティテュートの活動について

高橋 友子

今年度より、ディレクターに就任いたしました。今後とも、同インスティテュートへのご支援とご協力を賜りますよう、よろしくお願いいたします。

今年度の年間の活動について、ご報告いたします。

まず、6月4日のアッセンブリー・アワーの時間には、NHKラジオ・イタリア語講座の講師で、本学の非常勤講師をも勤められている武田好先生に「イタリア女性のライフ・スタイル」というタイトルで公開講演をしていただきました。

6月11日から7月2日までの金曜日には、「文学に描かれた女性」というテーマで連続セミナーが開催され、予約が殺到するほどの好評でした。ご担当いただいた藏中先生、平井先生、孟先生、上西先生、ありがとうございました。

また、毎年秋に宝塚市立男女共同参画センター・エルで行なわれております学外講演会は、今年度は英文学科の津田先生と人間科学科の金沢先生がお引き受けくださいました。

そして、2005年2月22日(火)の午後に、総合文化学科との共催で、京都大学大学院人間環境学研究所助教授の小山静子さん(主要著書は、『良妻賢母という規範』『家庭の生成と女性の国民化』など)をお迎えして、明治期から今日までの女子教育についてのミニ・シンポジウムを開催する予定です。どうぞふるってご参加ください。

また、今年度の『女性学評論』の特集のテーマは、「異文化とジェンダー」です。2001年9月11日の同時多発テロからイラク戦争へと、世界情勢は混迷をきわめ、一国の枠組の中ではもはや解決しえない複雑な問題が数多く出てきています。北朝鮮の拉致事件も、異文化について考えさせられる重要な機会を提供しました。このテーマにかんして新鮮な問題提起をしてくれるような投稿が、たくさんありますようお願いしています。

それから、インスティテュートの機関紙『ニュース・レター』に掲載のエッセイに付けられていた、「女と男」というタイトルがなくなりました。その理由は、同性婚の承認や戸籍上の性の変更の認可など、今日の世界と日本におけるセックスとジェンダー、セクシャリティをめぐる動きが、もはや「女」と「男」という単純な二項対立的図式では捉えられないし、理解もできないほど多様化してきていることを考慮したためです。

私が女性学と出会ったのは、80年代前半で大学院に

在籍していたころです。指導教員はもちろん、大学院生も全員が男性という環境にあって、私はしばしば自分が疎外されているように感じ、そんな環境に違和感をもち続けていました。そんな折、京都で開かれていた女性学の研究会を紹介され、出席の回を重ねていくうちに、多くの女性の先輩方が私と同じような疑問をもち、女性の視点から諸学を問い直すという女性学の仕事に専心しておられることに、たいへん勇気づけられました。以来、これらの研究会を、私は自分を育ててくれた古巣のように、大切に思っています。

90年代に入って、女性学はジェンダー・スタディーズへと進展していき、ストーカーやDVに対する防止法が制定されるなど、日本社会も変わってきています。けれども、女性をめぐる状況は、かならずしも十分に改善されたとは言えません。学生たちの就職活動の話を開けば、それは明らかです。私は、女性学インスティテュートの活動に、このような今日的な問題をできるだけ取りあげて、本学と学生たちのために生かしていきたいと考えています。今年度からのインターディシプリナリー・プログラムの導入も、このような目的にかなうものでしょう。

(女性学インスティテュートディレクター文学部助教授:西洋史)

## 連続セミナー「文学に描かれた女性」を担当して

【第1回：2004年6月11日】……………藏中さやか  
●「激動の時代に生きて

～『建礼門院右京大夫集』の世界』

時代の転換期を確かに生き抜いた建礼門院右京大夫。著名な『平家物語』に比して、彼女の遺した『建礼門院右京大夫集』は一般の方々には余り知られていない。今回は八百年の歳月の隔たりを全く感じさせないみずみずしい感性によって綴られた作品世界を紐解き、その表現から彼女の人生の軌跡を追った。

まず、源平の争乱のごく大まかな展開、右京大夫の出自と関係人物を年表、系図を用いてご紹介し、さらに上下巻からなる作品の全体構造について触れ、本文の読解へ。

集の完成段階で首尾を整える形で付されたとおぼしき序と跋を対比し「書き置く」、「書き付く」、「わが目ひとつにみん」という表現の意味するところを考え、作者自身の「名」意識について解説。さらに「なべての人にはあらじ」と恋愛への気構えを語りつつも「契り」故に逃れ難かった平資盛との関係、「夢かうつつか」と

思われた合戦前後の揺れ動く心情、資盛の「道の光も必ず思ひやれ」ということばを胸に追憶と供養に生きた後半生をやや駆け足に味わった。この中で特に頻出する「契り」、「夢」という語の作者独得の用法には注目した。

折々に記しおいた、華やかな前半生と鎮魂に生きた後半生の日々との感慨を纏め上げた本作品は、今風に言えば「自分史」であろう。終了後、受講生の方から頂いた「幻想ではない平安時代を感じた」という感想が心に新鮮に響いた。自分自身にとっても日本古典文学の魅力を改めて考える契機となったことが有り難かった。

(文学部助教授：日本文学)

### 【第2回：2004年6月18日】……………平井雅子

#### ●「見えない戦争を闘う女性：第一次大戦と英国小説」

40代から70代の男女、約60名が教室を埋め、その真剣さに私の胸はときめいた。第一次大戦中に『恋する女達』を執筆し、ドイツ人の妻をもちスパイ扱いもされた英国の作家D. H. ロレンスの「文学に描かれた女性」について講演した私の主眼は、女達の「見えない戦争」―戦場の殺し合いに劣らず、より本質的で現代人の生き方全般に及ぶ戦い―にあった。愛する人を戦場に送り、工場で爆弾作りに励んだ女達。背景にある現代文明は、企業戦士と巨大な機械の歯車としての男性を生む。その男性との結婚生活に意味を見出せない新しい女性。この日の聴衆も各の人生、自身や家族の戦争体験、社会的関心を有するためか、その集中力は最後まで途切れなかった。講演後、話しに来られた方々の「これからは、見えないものを見ることを心がけて文学を読んでいきたい。」という言葉に力づけられた。反省もある。

フランダースの戦場の写真を配った。塹壕に水が溜まり、そこに滑り落ちそうな格好でヘルメットをま深にかぶり座っている兵士と、その向こうの路上をカメラとスタンドらしい荷を背に歩み去ろうとするもう一人の兵士。二人はどちらの軍の兵士か？ の問いに対して、正しく答えた人はドイツ軍の深いヘルメットを知っていた。私が反省するのは、みんなを「間違いたくない。」という気持ちにさせ、ヘルメットのように見える物にだけ答を求め心理に陥らせたことである。想像力を働かせて見ることだ。座っているように見える兵士が死んでいるのは直観的に判る。その姿に背を向けて歩み去るのは敵軍の兵であろう。そこには目に見える行為の背後の人間の心情、それにカメラを向ける第三の兵士の目、ああ人間よ！ の想いが映っている。

(文学部教授：英文学)

### 【第3回：2004年6月25日】……………孟 真理

#### ●「ゲーテの女性像」

『若きヴェルテルの悩み』は主人公の心情吐露を中心

とした書簡体小説だが、本講義では、ヴェルテルが思いを寄せる女性ロッテが作品の前半と後半で異なる顔をもつことに注目し、そこにゲーテの―女性像というよりも―一人間像のふたつの原型を読みとった。

まず婚約時代のロッテは、ほぼしる豊かな感情と堅実な生活感覚とのたぐいまれな調和の姿として描かれており、時代精神に照らした、また時代を超えた理想像となっている。いっぽう人妻となったロッテはこの調和を失うが、しかし道徳の要請に従って情念を切り捨てることができない。優柔不断ともいえるこの後半のロッテ像は、作者が初版出版後13年を経た改訂版(1787)であえて書き足したものであり、硬直していく市民道徳に対置される人間らしさへの希求が託されている。

ロッテのふたつの姿は、その後の作品にふたつながら受け継がれる。調和の理想を体現ないし志向する毅然とした女性像と並べて、情念の嵐にさらされ滅びていく女性たち(たとえば『親和力』のオティーリエ)が愛情を込めて描かれるのである。そこには、人間の内なる自然に対するゲーテの深いまなざしがある。

あまりにも著名な作品を取り上げ、女性像という一面にのみ光をあてることにはためらいもあったが、受講者の多くの方々が感想文の中で、かつての読書体験を思いおこし、今回示した解釈と比較して下さった。対話的要素を盛り込みにくい一回限りの講義だったが、聞いて下さった方々の内部において対話が生まれ、一編の小説に多様な読み方がありうることを感じていただけたのであれば、幸いである。

(文学部教授：ドイツ文学)

### 【第4回：2004年7月2日】……………上西妙子

#### ●「フランス心理小説

##### ―フロバールの2作品をめぐって」

フランス心理小説の古典、ラ・ファイエット夫人作『クレヴの奥方』(1678)でセミナーは始まった。その粗筋を簡単に言えば、「<貞淑な>妻の恋。<尊敬に値する>その夫への告白。それに続く夫の死」とできる。「利己心はあらゆる種類の言葉を話し、あらゆる種類の人物を演じ、無欲な人物まで演じてみせる」という、同時代のラ・ロシュフコーの言葉が見抜いているように、交わされる両者の言葉は、「生」と「徳」をめぐっての、ともに「最高」でありたい「発信者」と「受信者」の間のまさに闘争の観を呈する。

それから二百年以上たって、19歳のラディゲは『クレヴの奥方』の舞台を20世紀に移して『ドルジェル伯の舞踏会』(1924)を書き、「清浄な心のやる無意識の操作というものは、ふしだらな心のやるさまざまな工夫工面より、もっと奇異なものである」と、最初の頁に記した。闘争は続いている。< p. (4)に続く >

## 「異国の地で法廷に立つ外国人女性」

長尾 ひろみ

私は法廷通訳という仕事を20年以上やってきました。その関係で多くの外国人の女性の裁判に立ち会いました。彼らの壮烈な生き方を垣間見ながら、生きるということの重さを感じています。

法廷通訳とは、日本で何らかの犯罪にかかわり裁判で裁かれる外国人の通訳をする仕事です。英語を話す（通じる）外国人が被告人になった裁判で、検察官、弁護士、裁判官そして被告人の四人の意思の疎通を図るための媒介になるのです。日本の裁判所ではすべて日本語で行われ、日本語で記録が取られます。1人で4人の通訳をするのですから、公判中ずっと通訳人はメモをとりしゃべっているのです。

今は裁判所も母語中心主義を取るようになりましたので、英語の通訳人がフィリピン人の通訳をすることはめったになくなりましたが、10年くらい前は、警察に捕まって「English OK?」と聞かれて「OK」と答えてしまうと警察と検察庁での取調べ、そして裁判も英語の通訳がつくことになっていました。ですからフィリピン人のいわゆるジャバユキさんの法廷での通訳を良く担当しました。多くの女性は暴力団がらみの斡旋で日本に入ってきてホステスやダンサーとして働き、ほとんどの稼ぎを国に送金するのです。日本から毎月4万円送金すると8人くらい家族が食べてゆけます。無事に30万円くらいお金を貯めて国に帰ると家を建てるのが出来ます。

その中に父親の分からない子供を身ごもり苦勞する女性もいます。いわゆるジャッピーノ (Japanese Philippino) と呼ばれる子供を抱えて日本で暮らすのは並大抵ではありません。日本に住むそのような子供は無国籍の場合が多いのです。不法で働いている、また働かざる女性たちが子供の出生届けを取ること、不法就労が明らかになり、自らが強制送還になってしまうからです。

女性であるがゆえに理解できる女性被告人の苦悩。中立にならなければならない法廷通訳をしながら、表は淡々と通訳しますが、心の中では犠牲になっている女性に対する同情、共感、そして社会に対する矛盾や怒りを覚えます。(文学部助教授：通訳)

## 「男惚れ/女惚れ、男嫌い/女嫌い」

浜下 昌宏

男惚れできる男性が減った。昔のヤクザ映画のヒーロー、学生運動の活動家、面倒見のいい中小企業の社長さん、祭りのときの勧進元といった人の中には、男だけの世界を作るような、女性を域外からはじきだすような、文字通りのホモ・セクシュアル的な剛毅さを持つ男性がいたように思う。そこでの徳目は、恥を知り、約束を守り、弱音を吐かず、甘えを排し、馴合いの徒党を卑しみ、弱者の側に立ち、卑劣なふるまいを憎み、孤立しても辛抱強く独立独歩を貫くような、信念の雄雄しさがあつた。

(軽薄な“生きざま”などという表現はぞっとする。) そうした徳義がどのようにジェンダー的の意味合いを持つのか、私にはわからない。他方、おそらく、女性にも特有の友情があるのだろう。本学のゼミの同級生たちの交友のようすを見てみると、女性同士特有の共感があるようだ。(と同時に、“女の闘い”といった言い方にも出くわすものだが。)カポータイなどを読んで学んだのだが、女同士(レズビアン)にあつてもdikeとbutchという役割分担があるらしい。後者には“男気”があるのだろうか。しかし、歌舞伎の女形が男による虚構であるように、butch的(男)(タカラヅカ的?)は女性によるフィクションにちがいない。生身の男は、男を誘惑するためには、異性への意識はない。もしかすると理想的な武士道の世界がそれであり、またダンディズムもそうだろう。つまり、「ええかつこしい」は異性には向けられていない。そこでは傲慢さも徳目となる、剛直な心を支えるプライドの現われとして。それは「女嫌い」「反女性」のメンタリテイなのだろうか? いや、同性に惚れることは異性を嫌うこととは別の話であろう。他方、女性が同性を意識したふるまいを見せるのは誘惑を意図しての上ではあるまい。そこには(私には)何か複雑さを感じさせるものがある。そして、こと事態が男女間に関わると、話はわかりやすく、〈たくらみ〉が生まれるようだ。『シンドバッド譚』などを読むと、讒言・虚言・仮装・策略の次第が見事である。やはり、同性に惚れ、異性と葛藤するのが、健全な生き方のように思えるのだが……。

(文学部教授：美学)

本セミナーはこういうわけで、「私らしく幸せになりたい」という女性の「決意」が、極めてはしたないままどうしようもなく痛々しいものになっていく様を見ることになった。フランス文学は、人間の「純粹」を訝りながら、「卑しく崇高な混沌」のなかに人間を見ろといえるのだが、読後には、人間への敬意をおぼえて元気がでる。この後に読んだフロベールのボヴァリー夫人(1857)も『感情教育』(1869)のアルヌー夫人も、「自分は自分でしかないという真の悲しみ」を見事に生きた女性たちであった。

(文学部教授：フランス文学)

## 2004年度前期活動報告

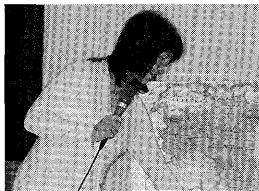
### 特別講演会

2004年6月4日(金)

「イタリア女性のライフスタイル」

会場：神戸女学院講堂

講師：武田 好氏



武田 好氏

(神戸女学院大学非常勤講師、NHKラジオイタリア語講座講師)

出席者：120名

### 連続セミナー「文学に描かれた女性」

会場：神戸女学院大学ジュリア・ダッドレー館104教室

〈第1回〉2004年6月11日(金)

「激動の時代に生きて～『建礼門院右京大夫集』の世界」

講師：藏中さやか

(神戸女学院大学文学部助教授：日本文学)

〈第2回〉2004年6月18日(金)

「見えない戦争を闘う女性：第一次大戦と英国小説」

講師：平井雅子氏

(神戸女学院大学文学部教授：英文学)

〈第3回〉2004年6月25日(金)

「ゲーテの女性像」

講師：孟 真理氏

(神戸女学院大学文学部教授：ドイツ文学)

〈第4回〉2004年7月2日(金)

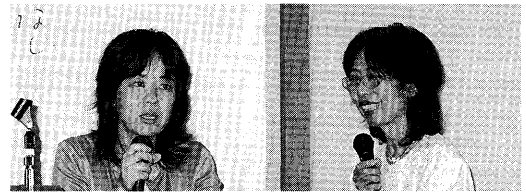
「フランス心理小説－フロベールの2作品をめぐる」

講師：上西妙子氏

(神戸女学院大学文学部教授：フランス文学)

[受講者：59名 平均出席者：43名

終了証交付者：41名]



藏中さやか氏

平井雅子氏



孟 真理氏

上西妙子氏

### 2004年度後期講演会、シンポジウムのご案内

#### ■学外講演会

会場：宝塚市立男女共同参画センター・エル(宝塚市)

※阪急・JR「宝塚」下車スグ、「ソリオ2」4F

〈第1回〉2004年11月10日(水) 14:30～

「豊かに生きるということ

ーインドの環境運動、チプロに学ぶー」

講師：金沢謙太郎氏

(神戸女学院大学人間科学部専任講師：環境社会学)

〈第2回〉2004年12月4日(土) 10:00～

「津田梅子とその家族のダイアスポラ」

講師：津田ヨランダ・アルファロ

(神戸女学院大学文学部助教授：グローバル・スタディーズ)

#### ■シンポジウム

日時：2005年2月22日(火)

テーマ：「明治から現代に至る女性教育」

講師：小山静子氏

(京都大学大学院人間環境学研究科助教授)

★女性学インスティテュートは図書館本館1階にあります。図書の閲覧・貸出希望者はT-14・13室まで。(帯出・返却の手続きはT-14室で行ってください。)

#### 2004年度女性学インスティテュート編集委員

石川康宏、難波江和英、清水忠重、塩見尚史、高橋友子

(委員長)(ABC順)

編集事務：溝口芳子

編集・発行：神戸女学院大学女性学インスティテュート

☎662-8505 西宮市岡田山4-1 TEL/FAX:(0798)51-8545

E-mail:gender@mail.kobe-c.ac.jp

URL <http://www.kobe-c.ac.jp/gender/>